



けやき

宇都宮市立上河内中学校

学校だより 第1号

発行責任者 校長 西原 良一

新しい年度のスタートにあたって

「平成最後の年」、そして、「令和元年」となる新しい1年間でスタートしました。4月8日に行われた始業式の中で生徒たちに次のような話をしました。

『霧の中を行けば覚えざるに衣湿る』

禅の言葉ですが「身を置く環境によって知らず知らずのうちにその影響を受ける」という意味で、一人一人が他の人にいい影響を与える人になるよう努力し、その結果として、上河内中学校が、みんなにとって良い環境になるようにしてほしい。

そのためにぜひ実践してほしい3つのこと。

- 1 各自が目標を持ち、その実現に向けて粘り強く取り組む。
- 2 言葉の持つ力を意識して、言葉を使う。
→ 明るく、大きな声であいさつをする。
→ 時と場、相手のことを考えて言葉を発する。
- 3 他の人に嫌な思いをさせないことを心がける。

至極、当たり前のことですが、実践するとなると、なかなか難しいものだと思います。でも、上河内中学校で子どもたちが安心して生活し、心も体も健全に成長していくために、是非とも子どもたちみんなに取り組んでほしいと考えています。

そして、その子どもたちを支援する教職員には、どうあってほしいかということをも4月1日の最初の職員会議でいろいろとお願いしました。その話の中で取り上げた詩をご紹介します。



誉めてあげれば、子供は明るい子に育つ。 愛してあげれば、子供は人を愛することを学ぶ。 認めてあげれば、子供は自分が好きになる。 見つめてあげれば、子供は頑張り屋になる。 分かち合うことを教えれば、子供は思いやりを学ぶ。 親が正直であれば、子供は正義感のある子に育つ。 優しく、思いやりをもって育てれば、子供は優しい子に育つ。 守ってあげれば、子供は強い子に育つ。 和気あいあいとした家庭で育てば、子供はこの世の中はいいところだと思えるようになる。

ドロシー・ロー・ノルト

先生たちには「親」を「先生」に、「家庭」を「学校・学級」に置き換えてほしいと伝えましたが、保護者の皆さんにもこの詩に書かれているように子どもたちに接していただきたいと思っています。

また、会議では、最近の「働き方改革」の流れには逆行しそうですが、私自身が教師として、ずっと信条としているルーフィニの言葉も先生たちに話させてもらいました。それは次の言葉です。

教師はロウソクのようなもの。
みずからを燃やしつくして、生徒を照らす（啓発する）



新たに仲間入りした教職員を紹介します



鈴木 克明 先生
担当教科 : 社会

今年度、晃陽中学校より異動してまいりました、鈴木です。12年ぶりに戻ってきました。また新たな気持ちで、上河内の子どもたちの成長の一助となるよう、がんばりたいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。



田中 伸一 先生
担当教科 : 国語
横川中学校から参りました。教科は国語です。一生懸命頑張りますので、よろしくお願いいたします。



岡本 和也 先生
担当教科 : 社会
生徒一人一人が輝けるようサポートしていきたいと思えます。よろしく、お願いします。



影山 千恵 先生
担当教科 : 英語
国本中学校から来ました。上河内中学校のみなさんとこれからどんな思い出を一緒につくっていけるのか楽しみです。よろしく、お願いします。

この他にスクールカウンセラーとメンタルサポーターの2名が変わりましたが、後日、改めてご紹介します。

ある寓話から

保護者の皆さんが、親の目を通して見る我が子。私たちが教師の目を通して見る生徒。どちらも同じ子どものはずが、異なる姿に見える。また、実際に子どもは、状況に対応して変化もする。

だからこそ、家庭と学校が、互いに知らない子どもの一面があることを認識し、それを共有し、協力することはとても大切なことではないでしょうか。

6人の目の不自由な人が生まれて初めてソウに触れた。

足に触った目の不自由な人は

「ソウとは木のようなものだ」と言った。

しっぽに触った目の不自由な人は

「違う。ソウとはロープのようなものだ」

鼻に触った目の不自由な人は

「何を言うか。ソウとはヘビのようなものだ」

わき腹に触った目の不自由な人は

「いやいや、ソウとは壁のようなものさ」

耳に触った目の不自由な人は

「バカだね。ソウとは木の葉のようなものだ」

牙に触った目の不自由な人は

「ソウとは槍のようなものだ」